

SHINTOKU

2 第20回空想の森映画祭

堀川 慶治

北海道上川郡新得町で9月の連休に毎年開かれているドキュメンタリー映画祭に今年も行ってきました。十勝平野のど真ん中にあるこの農村地帯で、何故映画祭？と思われる方も多いと思われませんが、実はこれが三重県と大いに関係があるのです。



現在、沖縄辺野古で『庄殺の海』を撮り続けている四日市出身の藤本幸久監督の現住所がこの新得町の町営住宅。「闇

を掘る」などのドキュメンタリー映画の制作のため、長く北海道に滞在した藤本が縁あってこの地に居を構え、地域貢献も兼ねて始めた映画祭が20年続いているのです。

例年は前夜祭と本番3日間でしたが今回は5連休とあって、前夜祭と本番4日間そしてスタッフの打ち上げ宴会迄6日間新得にて、設営から撤収まで、お手伝いをして来ました。会場は昭和49年迄使われていた旧新内小学校の新内ホール。新内は東の帯広釧路方面に続く根室本線と北の旭川方面と結ぶ富良野線の結節点に当たり、鉄道の要衝であったとか。国鉄の官舎がありその子弟が多かったという。

さて、肝心の映画祭である。これもまた一風変わっていて、ドキュメンタリー映画祭と銘打っていますが、劇映画あり、ゾンビ映画あり、コンサート、講演（ここ迄は例年）、そして何と今年は落語（橘屋扇三）まで、見事に多彩な催しなのである。コンサートもNHK Eテレ「にほんごであそぼ」出演のおおたか静流（しずる）率いるASIANWING7名や、ウクライナ出身のカテリーナによるバンドウーラの演奏と歌、趙博の一人芝居など、一流のアーティストが出演しているのだ。

今年は義兄長田紀生が、『ナンバーテンブルース』を上映したので分かったのだが、何とギャラが一律5万円（交通費・上映権込）というのである。毎年韓国からもドキュメンタリー映画が、監督と数名のスタッフ同行で上映されているのだ

が、手弁当で成り立っているイベントというわけだ。どうしてこんなことが可能なのか？というところ、やはり藤本幸久監督の仁徳に尽きるようである。有名な人は、大抵話が決まると札幌公演などを組み、旅費や宿・ギヤラを確保した上で、旧交を温めに持ち出しでやって来てくれるという訳だ。一昨年は、京都大学の小出裕章助教が原発の講演に来て、千名を超える観客が集まったのだが、手弁当だったのですね。流石ですね小出さん、そして藤本君。

ボランティアのスタッフも地元の人たちをはじめ、道内各地からそして座間のおばさんたち（7名余りが常連）など約20名。基本は寝袋持参で、会場内で雑魚寝。ザマーズのおばちゃん達が賄いをしてくれるので、食費、宿泊料、入場料は掛かりませんが、ビールやお酒などは購入（貴重な収入源）する必要があるのだ、まあそれなりに協力？する必要経費です。私は4年連続で参加していたことと監督の旧友ということで、ベッドを与えていただきました。

この映画祭も藤本幸久監督が、「今回で主宰を降りるが続ける覚悟があるなら協力は惜しまない」と表明したことから、地元の若手がスタッフとして参加してくれており、是非とも続けて欲しいものだと思っている。継続こそ力なのだ。

